

あと数日で年も暮れるというのに一晚中蚊に悩まされ、また暁色のない屋外へ法華宗の老僧と二人でソツと出てみる。外は皎々たる半月と大きな星が光りを競っている明るさ。広い緩やかな上がり勾配の道をはるかに見える大塔の光りを目あてにポツポツ歩いて行く。左に見える北斗星の下に、いくつかの外国の寺院がそれぞれそのお国ぶりの建築を並べている。

のぼりきつて月光の下の大塔を仰ぐ。シーンとした四囲、塔の正面、東の方の空にはたしかに大きな星——拝むとか何とかいう作札などまるで忘却して、ただ恍惚として佇っていた。どのくらい時間が経ったか。音をぬすむように正面の方へ廻り十段ほどの石段を下ってゆく。

あとにも先にも、もう何人かの外国人らしい参拝者がある。みな一語も発しない、がこの暁の階下のどこかでは低いツツヤキが聞えてくる。月の反対側になるために暗い東向きの表参道を塔に近づくと、左右の石だたみのあちこつちで、男女様々なんなんが五体投地の仏徒最高の礼拝を行っている。掌を石だたみの上の板敷きにつけ、ひれ伏すこと一万遍などということをいく日も半徹夜で続けている。掌の皮膚が磨り剥けるので、布きれのようなものを左右に置いてその上に掌をおいて滑らせてゆく。そして口々にその国の言葉で陀羅尼か経かを誦し続けている。

また数十メートル四方の大塔と、その外側の石造子塔の並び立つ中を大理石の通路が廻っている。その廻路の上にも同じ五体投地をしながら、身の丈だけの前進をして塔を廻る行をしている人が点々といろ静かに聴いていると低い声で「ブツダ、ブツダ」と唱えているものもある。かたわらに佇っている私たちなどは全く眼中にない必死の念仏の姿。

正面の参道、廻路など舗装の大理石にもみな信者の掌の脂が沁みこんでいるようで、佇立して半身を曲げるくらい敬礼しかならないわれわれが、なにか大変な無礼を犯しているような気持ちになる。正面の階を下る時に脱いだ靴はそのままそこに置いて、靴下を通してくる石

の冷さを感じながら礼拝の間を縫って大塔の内へ入る。

堂内は十畳くらいの広さ、全部石造で奥に高い須弥壇があり、古い写真で見ると違って、今は大きなお眼を開いて説法印をしておられる釈迦像一軀がおかれ、灯と水を捧げただけの簡素を極めた宝前で、何の飾りもない堂内、四、五本の蠟燭がまたたいしている下で黄衣を着て坐禅の僧ひとり、看經の僧ひとり、おそらくこれも徹夜の行かと思う。石の床に座ってしばらく礼拝、暗さに馴れた眠で仰ぐと石像釈迦本尊の金色が近ごろ塗ったペンキらしいのに、この国の人たちにはもう仏教の信仰はないと、先夜大菩提会で聴いた言葉がふと脳裏をかすめた。むべなる哉。今ここにこのように礼拝を捧げているものはほとんどチベット、セイロン、タイなどの人々で、どうもインド人はいないようだ。五億近い人口の中でわずかに五十万の仏徒というのだから無理もない。

しかしこれは内緒の話で、表向きには仏教人口五百万と吹いてあるとのこと、未開的なヒンズー教が栄えて、高い哲学性を持った仏教が衰弱しているところに、何かこの国人の文化水準、生活水準といったものが感じられる。

五

拝礼の後、堂内の石階を登って大塔の腰廻りにある屋上へ出る。やや明けかけた朝の外気にふれながら塔の四周を瞰下し、またその屋上四隅にある飾りの小塔の姿を見る。むかしこの塔が回教徒によって破壊されようとした時、仏徒の手によって土を盛って埋めてしまったが、埋め尽せなかった塔の上部はついに破壊の厄にあつてしまった。六百年の後、英国人の手によって四隅の小塔をモデルとして、この百七十何尺、メートル法では五十何メートルかの大塔の尖端部分を復原したという。なるほど離れて見る大塔の頂きと、四つの小塔は全く同じである。

さらにこの大塔下四周にある多くの小塔にも、同型のものが少なくない。英国人もちよつと話せる人があるなアと感謝の気持ちも湧く。

(つづく)

『仏教書道』昭和四十一年